

目的：現在の経済情勢は停滞期であるが、物資は豊富に出回っている。しかし、私達が本当に望む品質の物を探す事はそれほど簡単ではない。特に衣料品は嗜好が優先する品と考えられる事からも、若者中心の市場では中高齢者に適する物は見つけにくい。装う人間の高齢化に伴う体型や好みの変化にも即応し、機能的・生理的に着心地の良い衣服が望まれる。そこで中高齢世代の衣服情報を収集し、体系化することを試みた。

尚、本調査研究は”被服教育を考える集い”のメンバーによるものであり、今回はその一端を報告する。

方法：学会誌（家政誌、織消誌、人間工学会誌等）及び、一般雑誌を情報源として、1985～1995年までの中高齢世代の衣服に関する研究報告を収集。更に1991～1995年までの新聞（朝日、日経、読売等）や東京、埼玉等の広報誌に掲載された衣生活に関する記事を集めた。これらの内容を、A衣服材料、B体型、C色柄、Dデザイン・構成、E動作・生理、Fその他の6分野に分類し、考察を行った。

結果：本調査の結果、デザイン分野が30%と多く、次いで動作、生理、心理、色柄等の順であった。また、来るべき高齢社会にそなえ、現在各方面から多くの関心が寄せられており、住居、食事、医療、介護等、非常に多くの文献が見られた。しかし、高齢者を対象とした衣服の研究は、それ等に比しごく僅かである。特に個人の好みは、年齢には左右されないため、心理的な影響が多分に大きいものと考えられる。